

氏 名	西岡 孝芳
学位の種類	博士（ 医学 ）
学位記番号	第 6200 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学位論文名	Outcomes of Hepatic Resection in Intrahepatic Cholangiocarcinoma Patients with Diabetes, Hypertension, and Dyslipidemia :Significance of Routine Follow-Up (糖尿病, 高血圧, 脂質異常症患者における肝内胆管癌の切除成績 -定期受診 の重要性 -)
論文審査委員	主 査 柴田 利彦 教授 副 査 河田 則文 教授 副 査 福島 若葉 教授

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】肝内胆管癌切除症例の治療成績から糖尿病、高血圧および脂質異常症などの生活習慣病の一因となる疾患（メタボリック因子）を有する患者における肝内胆管癌に対するスクリーニングの重要性を検討した。

【対象】1990 年 1 月から 2014 年 7 月までに肝内胆管癌に対して切除術を施行した 94 例中、既知の危険因子（ウイルス性肝炎 33 例、アルコール多飲 7 例、肝内結石 7 例、職業性胆管癌 4 例）を有さない 43 例（46%）。

【方法】43 例をメタボリック因子に対して定期受診（最低 6 か月毎に診察、血液検査、画像検査のいずれかを施行）を受けていた 16 例（定期受診群）、非受診 14 例（非受診群）およびメタボリック因子を有さない 13 例（対照群）の 3 群に分け、臨床像および治療成績について比較検討した。

【結果】定期受診群の 13 例（81%）は・-GTP もしくは CA19-9 値上昇あるいは画像検査での異常が発見契機だった。有症状率は他の 2 群で高かった（ $p = 0.0049$ ）。リンパ節転移は受診群では認められず、非受診群で 43%、対照群で 46%に認められた（ $p = 0.007$ ）。組織学的進行度は定期受診群は全例 I/II である一方、他の 2 群は III/IV の進行癌の割合が多かった（非受診群 43%、対照群 54%、 $p = 0.003$ ）。再発症例で検討したところ、定期受診群では肝外再発の頻度が低かった（定期受診群 13%、非受診群 78%、対照群 63%、 $p = 0.0232$ ）。術後全生存率は定期受診群（5 年、66%）が非受診群（同 34%、 $p = 0.034$ ）および対照群（同 0%、 $p = 0.001$ ）と比べて良好であった。

【結論】メタボリック因子に対する定期受診中に発見された肝内胆管癌症例は進行度が I もしくは II の比較的早期であり、治療成績は良好であった。メタボリック因子を有する患者に対しては定期的なスクリーニング（・-GTP や CA19-9 値測定、画像検査）が重要と考えられた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、肝内胆管癌切除症例の治療成績から糖尿病、高血圧および脂質異常症などの生活習慣病の一因となる疾患（メタボリック因子）を有する患者における肝内胆管癌に対するスクリーニングの重要性を検討したものである。

1990 年 1 月から 2014 年 7 月までに肝内胆管癌に対して切除術を施行した 94 例中、既知の危険因

子（ウイルス性肝炎 33 例、アルコール多飲 7 例、肝内結石 7 例、職業性胆管癌 4 例）を有さない 43 例（46%）を対象とした。

43 例をメタボリック因子に対して定期受診（最低 6 か月毎に診察、血液検査、画像検査のいずれかを施行）を受けていた 16 例（定期受診群）、非受診 14 例（非受診群）およびメタボリック因子を有さない 13 例（対照群）の 3 群に分け、臨床像および治療成績について比較検討した。

定期受診群の 13 例（81%）は γ -GTP もしくは CA19-9 値の上昇あるいは画像検査での異常が発見契機だった。有症状率は他の 2 群で高かった ($p = 0.0049$)。リンパ節転移は定期受診群では認められず、非受診群で 43%、対照群で 46%に認められた ($p = 0.007$)。組織学的進行度は定期受診群では全例 I または II であったが、他の 2 群では III または IV の進行癌の割合が多かった（非受診群 43%、対照群 54%、 $p = 0.003$ ）。再発症例で検討したところ、定期受診群では肝外再発の頻度が低かった（定期受診群 13%、非受診群 78%、対照群 63%、 $p = 0.0232$ ）。術後 5 年生存率は定期受診群（66%）が非受診群（34%、 $p = 0.034$ ）および対照群（0%、 $p = 0.001$ ）と比べて良好であった。以上よりメタボリック因子に対する定期受診中に発見された肝内胆管癌症例は進行度が I もしくは II の比較的早期であり、その治療成績は良好であったと結論づけている。

本論文はメタボリック因子を有する患者における肝内胆管癌のスクリーニング検査の重要性を示唆する研究である。その臨床的意義は博士（医学）の学位を授与されるに値するものであると判定された。